

第1回

中

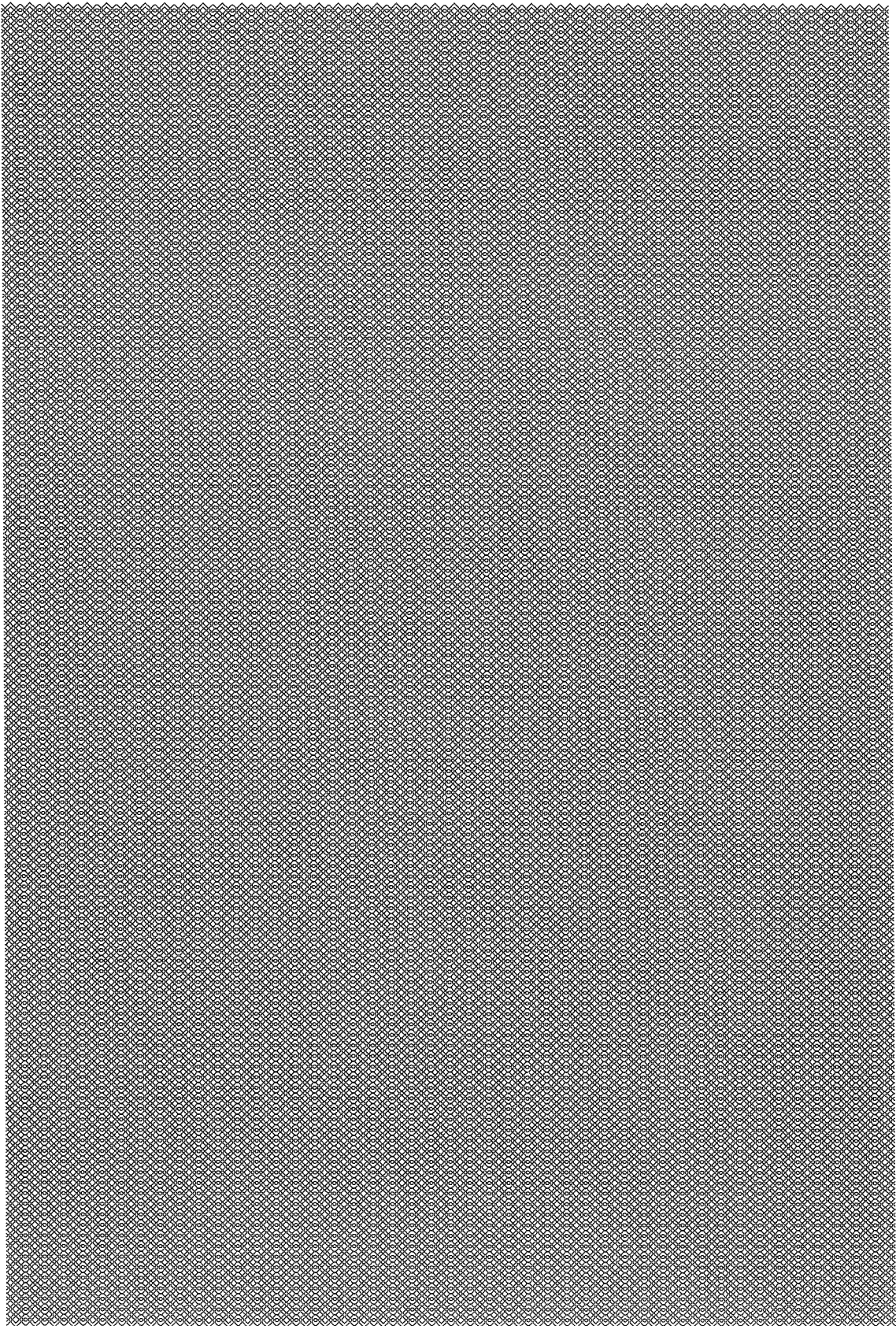
平成28年度

国語

注 意

- 1. 指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。
- 2. 答えはすべて解答用紙に記入しなさい。
- 3. 受験番号は、算用数字で分かりやすくはっきりと書きなさい。
氏名にはふりがなを忘れないこと。
- 4. 私語、用具類の貸し借りは禁止します。
- 5. 試験終了後も指示があるまで席をはなれてはいけません。
- 6. 質問があれば、静かに手をあげなさい。
- 7. 解答用紙のみ提出しなさい。問題用紙は持ち帰りなさい。
問題用紙の余白は下書きに利用してかまいません。
- 8. 文字は濃くていねいに大きく書きなさい。消しゴムを使ったあとは余計な点や線などの消し残しがないかよく確認した上で書きなさい。

受験番号					ふりがな	
					氏 名	



一

次の――線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- 1 苦渋の選択をせまられる。
- 2 鎌倉時代に建立された寺。
- 3 インフルエンザの予防接種をうける。
- 4 成功は努力に因る。
- 5 養蚕がさかんな地域を取材する。

二

次の――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- 1 波間にタダヨウボートを確認する。
- 2 行き過ぎをせせイする。
- 3 新しいコンピュータをドウニユウする。
- 4 昔から伝わる秘伝をサズける。
- 5 彼はジュンキョウの中にいても常に難しい顔をしている。

次の1～5の——線部を漢字に直したとき、——線部が同じ漢字になるものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

1 幾工にも渦を卷いた激流。

ア 背広を新チヨウする。

イ 滑りやすい道を慎チヨウに歩く。

ウ 意味深チヨウな言葉を発する。

エ 伸チヨウ率の高い金属。

オ 年に一度身チヨウを測る。

2 将来への不安が胸をツク。

ア 今日も横綱は完シヨウであつた。

イ コンサートの鑑シヨウは中止になった。

ウ 内政に干シヨウする。

エ 緩シヨウ材と一緒に梱包する。

オ 老後の備えに貯蓄を勧シヨウする。

3 魚カイ類が苦手である。

ア 患者を手厚くカイ抱する。

イ 校庭が一般にカイ放される。

ウ 怪我也ようやくカイ方に向かう。

エ 仲間にカイ報を送る。

オ 問題のカイ法を教わる。

4 身ダシナみを整える。

ア 彼はいつでも上昇シ向だ。

イ 新しい法律をシ行する。

ウ シ高の作品が完成する。

エ お客さまのシ好にあつた料理。

オ シ行錯誤のすえに成功する。

5 外国から講師を招_レセイする。

ア 不_レシ_ンな人に氣をつける。

イ 人間不_レシ_ンにおちいる。

ウ 長い不_レシ_ンから脱出して活躍する。

エ 不況のなかで経営に腐_レシ_ンする。

オ 新居を普_レシ_ンする。

四

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

一

西塔^{さいとう}の武蔵坊弁慶は、庭の真中で、せっせと、藁^{わら}を束ねていた。文治元年^{ぶんじ}閏四月^{うるぐし}と云う時で、額際^{がくがい}には汗の玉が吹出^{ふきだ}していて、時々隣りのとくつついたり、^①たらりと流れては、太い眉の上にたまったりしていた。

「何を、汗水流して、べんけい、している」

と、熊井太郎が声をかけた。

「わしは、うまい事を考えついでのう」

^②と云って、太いのや、細いのや束を縄でからげつつ

「さあ」

と、云って立上^{たちあ}がった。そして、三尺八寸黒塗の太刀を外して側へ置き、黒皮^{くろかわ}緘^{しん}に、裾^{すそ}に蝶の金具打ったものを脱いで、藁の上へ置き、衣^い裾^{すそ}の直垂^{ひたれ}を脱ぐと

「鎧下へ一つになると、昔の悪僧丸出したの」

と、太郎が笑った。弁慶は黙って、一番大きい束をとると、鎧の紐を外して、中へ押し入れた。そして、竹を一本突^つきさして、その竹の下へ、別の細い束を突きさして、それへすね^{あて}当^あてた。

「何^なんだ。藁人形か」

「何^どうだ。下郎の知恵では判るまい。これを遠くから見ると、本物そのままだから、どつと押し寄せた敵兵も、暫^{しばら}くは進み兼^{かね}て見えるだろう。所が、これが藁人形だから、動かない。それ、射てとれと云うので、びちんびちん射立てるが、当たたとて屁の河童だ。なあ、その間に別の方では本物が、さあ本物はこちらだと、べんけいすれば、心一つに身は二つ、丸い頭からふる知恵はちがつ

たものだろうな」

「突っかい棒をしないと倒れるよ」

「突っかい棒は大雑刀おおなぎなたです。雑刀杖に仁王立。七つ道具を背負いしに、智謀の多きぞ知られたり、と子供の唄にも——やあい、兵隊七つ道具が出てないぞ」

はあ、と云った兵隊は、やがて大きな熊手、槌つち、鋸のこぎり、鉞まさかり、突き棒、指し又、袖がらみを担って出て来た。弁慶は、それを一纏まとめにして藁人形へ縛りつけてから、いろいろ形を直した。七つ道具は（ 1 ）、藁人形の背中で開ひらがった。

「見す見すこれだけの物を敵に渡すのは惜しいが」

と云いつつ兵隊に

「起おこしてみい」

と、云った。兵隊は三人がかりで、人形を起おこした。人形はいろんな物を背負ってふらふらしながらやと立っている。

「丈夫な突っかい棒を二三本もって、夜の内に橋際に立てて来い」

と、弁慶は大声で云いつけた。

二

「待てつ、弁慶がいるつ」

と、一人が叫ぶと、口々に、弁慶弁慶弁慶と云って、全軍は一度にぴたりと止まった。

「あいつ一人だよ」

「今日は必死だから、うかつには近寄れないぞ」

「睨にらんでるよ、身動きもしない」

兵が口々に云っていると

「射てとれつ」

と、馬上から号令がかかった。兵は楯を前にして、弓を引しぼった。七八十本の矢が、吾劣われらず——だが、弁慶の七八間けん手前で皆地に落ちてしまった。

「臆病者つ、もつと進め、前へ出ろ」

と、馬上の大將が怒鳴った。兵は二足ばかり、楯をもって前へ出た。大將は同じ所にじつとしていた。

「覗のぞをよく定めて」

びゅんと弦鳴つるなりがして、矢は吾れ一と走って行つたが、弁慶の二三間前で、へ a 〳と申合もうしあせたように地へあやまってしまった。

「進め、進め、進めつ」

と、馬をとめたまま大將は、弁慶まで聞える位の大声を出した。兵はまた楯をもって、左右を見乍ながら、一直線を作つて、へ b 〳と一間ばかり前へ出た。

「わーつ」

と、云うと、二三人が、二足三足退さがった。全軍が、その声で、浮足になった。大將は馬を繰くさげて、馬の尻を兵につづけた。

「何どうした」

「弁慶が動いた」

と、一人が蒼白そうはくになつて云った。背後から軍目附いくさめつけが、

「何故進まぬ」

と、大声を出して、馬を乗入のりいれてきた。

「弁慶がいるんだよ」

と、大將が指ゆびした。軍目附は、ちらつとその方を見ると

「ああ——いた」

と、云つて、どんどん戻つてしまった。武蔵国の住人吉田次郎兼正という弓の上手が、馬を寄せてきた。

「皆どけどけ、わしを見ならえ」

と、云つて楯の所まで出ると、重藤の弓を引しぼつて、ひようと射た。矢は見事に弁慶の太腿へたつた。だが、弁慶は身動きもしなかった。

次郎兼正は、そうそうこの矢をつがえ乍ら顔色を変えていた。二の矢は胴の真中へぐさつと立った。弁慶は、ぶるつと身動きしたつきりで、矢張り動かなかった。

「さあ、皆射ろ」

と、云つて顔色を変えた次郎は引込んでしまった。兵は弓に矢をつがえたが、無言で御互に顔を見合せて、胴の真中に矢が立つたままのそのそ動出していたら、逃げるより外はあるまいと、考えていた。

三

高館の第二柵へ出てきた武蔵坊弁慶は、いつも着撫れた黒皮緘を、藁人形にきせてしまったので、萌黄緘に胴へ蝶を二つ打たせた意気な鎧をき、二丈二尺の八角棒に、鉄を打ったのをもち、鉢巻をしめていた。

どつと関の声と共に、雑木林を出た兵が、真黒になつて柵の方へ押寄せてきた。弁慶は大音声に

「やあやあ、西塔武蔵坊弁慶これにあり、近う寄つてくたばるな」

と、叫んで、八角棒を振かざした。だが、いつもなら、ぴたつとその声で止まってしまう敵が、何か囁き交したかと思うと、そろそろではあるが進んできた。

「さあ来れ。弁慶これにあり、さあ来れつ」

と、弁慶がいうと

「ありや賈物だよ」

と云う声がした。

「七つ道具が無い」

「いつもは黒皮緘だよ」

「あいつは常陸坊尊海なんだろう。尊海なら恐ろしくは無いぞ」

「尊海かな」

「そうだよ、弁慶の百分の一だ。一つかかつてみようか」

「やつつけてみる」

弁慶は、何を小癪な、いつもの鎧は表門の藁人形にかしてある、嘘だと思ふなら見に行つてみる。本当の、生きた弁慶は③

「やあやあ武蔵坊弁慶なるぞ、一度にかかれつ」

敵はどつと群つてきた。いつもなら、一足進むと、ばつと四散するのに、今日に限つて、八角棒を振廻して走りかかっているのに、薙刀を構えて、逃げようとしな

「虫けらつ」

と、叫んで弁慶は、ぶーんと一振り棒を振つた。わーつと退いたが、同時にうしろから五六人、薙刀を閃かしてかかつてきた。弁慶は、振向くと、横に払つた、と、すぐ横から又、薙刀が七八本きらつとした。汗性の弁慶は、もう汗をたらしながら、矢鱈無性に棒を振廻していた。

弁慶は人並以上に大きいので、自分の鎧を人形に借して人のを借りたが少しばかり小さかった。いつだって、自分の名を聞いただけで、逃げるから、今日もそうだろうと、高をくくつて出てきたが、こうたかつて来られると、本気にならない訳には行かなかった。

弁慶は、へ c 汗を流しつつ、縦横無尽に棒を振廻した。だが、敵は大勢、味方は一人、だんだん棒が重くなつてきた。義

経は楼の上から

「弁慶に加勢してやれ」

と、命じた。亀井六郎声に応じて

「亀井六郎、いざかかれっ」

と、叫んで出てくると、弁慶を取巻いて、（ 2 ）飛ついていた敵が、一目散に逃出してしまった。弁慶はふーっと息をついだ。

四

④ 弁慶は口惜しかった。自分の名声も、もう地に落ちたかと思った。御運の末になるというものは詮の無いものだ。人間は落目になると、こうも侮られるものか、と思いながら一息ついた。

「そうそう大手の蔭弁慶は——」

思出すと同時に、正門へ走って行つた。楼の上へ昇ると伊勢三郎は、謡を口吟みつつ、ゆらゆら楼が揺れるので振向いて

「おお、弁慶、見ろ」

と、云うと、藁人形の弁慶は、敵に対したまま、（ 3 ）矢を立てて、突立つていた。敵は小半町もさきの所へ、楯を二列に並べて、もう矢の立つ隙も無い人形へ、未だ矢を射かけていた。

矢は橋の上へ足の踏所も無い位に積重つていた。弁慶が眺めている内に、だんだん射出す数が少くなると、一人の兵が、楯をのけて出てきた。薙刀を構えながら、及び腰で

「弁慶っ」

と叫んだ。⑥ 楼の上の弁慶は、にこにこしながら一心にみつめていた。風が一しきり吹渡ると、人形は矢と共にゆらゆらとした。進んできた兵は、びっくりして立止まった。

「売込んだものだなあ」

と、伊勢三郎が弁慶の顔をみた。弁慶は鼻の頭に汗を出しながら

「うう」

と、云った。近づいた兵が、急に笑出して敵の方へ駈出しながら

「人形だっ」

と、叫んだ。それでも、敵兵は楯から一人も出て来なかった。

「人形だよ。嘘だったら俺の首をやる」

と、呼ぶと、四五人が走出してきた。

「人形だ。藁人形だ」

「道理で強い筈だ、あははは」

と、笑い乍ら人形へ近づいて、槌に手をかけた。弁慶はそれを見ると、すぐ側の弓をとって

「盗人」

と、叫んで、よっ引いて射た。矢は兵の頭を掠めて飛んだ。兵は驚いて手を放した。

「とられてたまるか」

と、叫んだ弁慶は、楼を飛降りると同時に門を開いて走り出た。敵陣からは、どっと一時に走り出してきた。

人形と弁慶の距離は七八間しかなかったが、敵と人形の間は小半町あった。弁慶は、人形を小脇にすると共に、踵を返して走った。

「坊主、待て」

と云って、一人の騎馬が追っかけてきた。

伊勢三郎は弓を取り上げて、笑いながらひようと射た。追った男は、馬から落ちた。

亀井、片岡、伊勢、駿河と、悉く討死をした。弁慶も今日を最後と、いつもの黒皮臈に、七つ道具、大薙刀に、四尺六寸の大太刀を佩いて、ただ一人のこのこと出て行つた。

衣川の橋へくると敵が現れた。弁慶は、橋柱の所で薙刀を杖に、突立っていると、ひたよせに寄せた敵は、少しもひるまずに進んできた。

「はて、この姿をしても、矢張り駄目かな」

と思つたがすぐ

「いや、又人形だと思つているのかしれぬ」

と、思直すと、名乗りもせずに、敵を睨んでいた。

「あれ、又、畜生め」

と、呟く声が聞えた。そして、十間程になると、顔を見合せて、躊躇しだした。弁慶は、さては悟つたな、と思つたが、まだそのまま身動きもしないでいると、大將らしいのが馬上で近づいてきた。春さきの小さい虫がさつきからへ d 〓していたが、丁度その時、弁慶の鼻の穴へ入つたので、弁慶は思わず、大きくしゃみをして、顔と身体をゆすらせた。

馬上の士は馬の平首にしがみついた。馬は何うしていいか判らぬので逆立をした。兵はわーと声をあげると、楯をすてて一丁余り退却してしまつた。*

弁慶は鼻をぐんと鳴らし乍ら、にやつと笑つた。

「せめて最後の戦なりとも、無益の殺生はすまい、南無阿弥陀仏」

と、云つて橋柱に凭れかかった。矢が飛んできて地を這つた。見ている地が矢で黒くなつた時分、一本の矢が草摺へぶら下つた。「これは辛い、身動きしないで、この調子で二三時も立たされたならやり切れたものでない。だが、せつかく売広めた名だ。最後

の様子を語り草にしておかんと、それこそふんけいだと言われる」

矢が鎧の裏を搔くまでは大変であつた。遠くから射たひよろひよろひ矢がやつと、鎧の糸にからむ位で、人形に劣らぬ位矢がぶら下つたが、致命傷にならなかつた。敵はそろそろと近づいてきた。七八人の兵が、走りよつた。弁慶はすっかり立ちくたびれてしまつた上に、矢が邪魔になつて手を動かすにも骨が折れた。兵が二三間に近づいた時

「未だ死なぬぞ」

と、物憂そうに云つた。兵は互にぶつかりつつ転げて逃げた。それから又矢がとんできた。全身に何百という浅い傷を受けた弁慶は、橋によりかかり乍ら連日の疲れにへ e 〓していた。

一時間もたつてから、騎馬の兵が十四五人寄つてきた。一間余りに近づいて、薙刀を取直した時に、弁慶はおはわと転び寝をした時の夢を見乍ら、いい氣持になつて、からりと大薙刀を倒した。倒れた薙刀は、騎馬武者の方へ、ひらつと閃きつつ倒れかかった。「ふわっ」

と、叫んで三人落馬した。二人は馳出すはずみに矢竹に馬を滑らせて、馬諸共に転げてしまつた。残りの者は三方へ、馬の鞍に身を伏せ乍ら、蒼白になつてしがみつこつ走らせた。

注

(直木三十五『べんけい』より。適宜表記を改めた。)

- ※ 一間は約 1. 82 メートル。
- ※ 一丈は約 3. 03 メートル。一尺は約 30. 3 センチメートル。
- ※ 一町は約 109 メートル。
- ※ 一丁は一町と同じ。
- ※ 一時は今の約 2 時間。

問一へ 〱 a 〱 e に入ることばとして適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア うとうと イ たらたら ウ ばたばた エ ひらひら オ そろりそろり

問二() 1 〱 3 に入ることばとして適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 扇あうぎを開いたように イ 針鼠はりねずみのように ウ ばったのように エ 車軸を流したように

問三――線部①「くつついたり」の主語は何ですか。文中より三字で答えなさい。

問四――線部②「さあ」と同じ意味のものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア さあ、わかりません。

イ さあ、こまった。

ウ さあ、がんばるぞ。

エ さあ、いらつしゃい。

オ さあ、どうなりますか。

問五――線部③「弁慶」と同じ「弁慶」を、本文中の――線ア 〱 オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

問六――線部④「弁慶は口惜しかった」理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 主君義経に危ないところを見られ、心配をかけてしまったから。

イ 亀井六郎に余計な手出しをされて、自尊心が傷ついたから。

ウ 借りた鎧が小さかったため、思う存分戦えなかったから。

エ 名乗りを上げたにもかかわらず、敵兵がひるまなかったから。

オ 源頼朝に都を追われ、はるばる奥州まで落ち延びてきたから。

問七――線部⑤「詮の無い」の意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 仕方ない イ えげつない ウ 不甲斐ない エ せわしない オ 面目ない

問八 ―線部⑥「楼の上の弁慶は、にこにこしながら一心にみつめていた」とありますが、このときの弁慶の気持ちとして適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の考えた作戦が非常にうまくいっていることに満足する気持ち。
- イ 自分の七つ道具や黒皮緘が敵兵に対して効果があることを目の当たりにして悦に入る気持ち。
- ウ 実は単なる藁人形だと知らず、過剰に怖がっている敵兵たちを面白く思う気持ち。
- エ 藁人形の弁慶が無数の矢を立てて突立っている姿をこっけいに思う気持ち。
- オ 自分の名声が保たれていることを実感し、まんざらではない気持ち。

問九 ―線部⑦「さては悟ったな」とはどういうことですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 敵兵たちが、弁慶の形をした人形であることに気がついたということ。
- イ 敵兵たちが、弁慶のふりをした常陸坊尊海であることに気がついたということ。
- ウ 敵兵たちが、弁慶の実力などさほどではないことに気がついたということ。
- エ 敵兵たちが、本物の弁慶であることに気がついたということ。
- オ 敵兵たちが、弁慶の必死な様子に気がついたということ。

問十 この文章の特徴として適切なでないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 戦場の様子を描いてはいるが、直接的な殺人の情景を描かないことも、文学作品としての品位を保つのに一役かっている。
- イ 「せっせと」「ぶるつと」など、様態を表すことばが随所に用いられているため、人物の描写が生き生きとしている。
- ウ 物語の展開上、また時々刻々変化する登場人物の心情を表す上で、会話文がうまく活用されている。
- エ 弁慶がいかにも恐ろしい存在かということを、戦場での敵兵たちの動向を克明に描くことで表現している。
- オ 弁慶の最期を描かないことで、彼が最後まで勇猛であったという印象を読者に残している。
- カ 源頼朝によって滅ぼされた義経とその家来たちの最期の様子を、叙情感あふれる筆致で悲劇的に描いている。

問十一 この文章から読み取れる内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 弁慶のようにめっぼう強い侍でも、時代の流れや勢いには勝てないという無常観が表わされている。
- イ 人間は名声や外見、印象といったものにいかにとらわれてしまうかということが描かれている。
- ウ どんな大義名分があつたとしても、戦争は結局悲劇しか生まないということを強く訴えかけている。
- エ 緊迫した戦場にあつても、ユーモラスな出来事は存在するという悲しい現実が描かれている。
- オ 戦争といつても、鎌倉時代のそれはまだまだ優雅でのんびりしたものだったことを示している。

次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。

現在の学問は、ふたつの両極端の方向へ走っています。ひとつの方向は専門分化です。専門的な学者になることは難しくはありません。現在の学問は、すでに十分に専門分化しており、そのなかで通常のコースを歩んでいけば自然に何らかの専門家になるわけです。

専門的な学問は、何らかの新しいさ（オリジナリティ）を発揮するという理解にもとづいて成り立っています。ですが、これだけ学者の数も多く、学問も積み重ねられてくると、それほど簡単に「オリジナリティ」など発揮できません。その結果、研究対象はどんどん細分化してゆき、ますます微細なものやいささか奇をてらったものになってきます。これまで注目されてこなかったテーマを見つけてくれば、その分野の「専門家」になり、普通の意味での学者になれるわけです。

考えてみれば、自然科学はいざしらず、^①社会や人文系の学問で、「オリジナリティ」などということ自体が奇妙なことではないのでしょうか。たとえば、プラトンやヘーゲルやハイデガーといった哲学者の書いたものを読むということは、彼らの思索のあとをたどり、彼らの思索から影響を受け、それをもとに自分の思索をそれなりに展開することのはずです。そんなところに、「オリジナリティ」などという観念はでてこないでしょう。どこまでがプラトンが述べていることで、どこからが自分が考えたことか、などという線引きはできません。

したがって、「オリジナリティ」をだそうと思えば、「後期プラトンの靈魂説について」とか、「ヘーゲルのキリスト教理解について」とか、そういうかたちで、研究対象を限定してゆく必要があります。それでも、まだ、プラトンやヘーゲルはビッグ・ネームですが、これらの大哲学者の研究がやりつくされてしまうと、もっと「小型の思想家」^②が取り上げられることになります。経済思想の分野で、少し前は、アダム・スミス研究が次々とでてきました。ところが、これが一段落すると、アダム・スミスの先生であるハチソン研究や、その周辺のファーガソン研究、ミラー研究、といったものがでてくる。むしろ、一般にはほとんど知られていない

人たちです。

専門的研究とはどうしてもこうなるのです。私は、むしろ、それが悪いなどといったわけではありません。私自身もそうした研究書を読み、さまざまなことを教わっています。しかし、その場合に、事態が少し極端化すれば、「もうアダム・スミスなどは古い」という心理が広がってきて、ほとんどスミスを読まずに、その先生であるハチソンやその周辺へいきなり行ってしまう、などということも起こりかねません。こうなるとやはり妙なことです。ついでにいうと、これはスコットランド啓蒙といわれる十八世紀イギリス思想分野の研究ですが、私は、ある研究者から、「結局、いろいろいるけれど、やはり本当に面白いのはスミスとヒュームの二人だけだね」という感想を聞いたことがあります。

繰り返しますが、私は、決して、これまであまり知られていなかった「小物」の研究が価値がない、などといったわけではありません。「小物」が実は大変な可能性を秘めていた「大物」だったことがわかれば、これは大変すばらしいことでしょう。ただここでいいたいのは、「オリジナリティ」という専門的業績の強迫観念のために、逆に、スミスやヒュームという「大物」^③から学び、彼らの問題について自分で考えるという「学問」の本来の姿勢が失われるとしたら、これは大変残念なことだし、学問のあり方としては本末転倒なのです。しかし、往々にして、アカデミズムのなかでは、専門主義のもつ「オリジナルな業績」という強迫観念が、この本末転倒を引き起こしかねないのです。

では、これらの「専門家」は、それぞれの専門に埋没していて、全く世間に向けて発言しないのかというと決してそうではありません。かつては「専門バカ」という言葉がはやりました。自分の専門のことは何でも知っているものの、それ以外の世間的常識が全く欠如した人という意味です。学生運動の時代に、運動家の学生から「専門バカ」と呼ばれたある数学の先生が「私はたしかに専門バカだ。けれど君らはただのバカだ」といったというような話もありますが、それはともかく、今日のある種の専門家は、

X、テレビに出てきたり、評論活動を展開したり、総合雑誌に書いたりします。

これはこれでXなことです。しかし、それはあくまで「専門家」として書いているのであって、必ずしも「知識人」として

書いているわけではありません。「知識人」は、物事を総合的にみて、そこに自分の思想や考えを表明するものです。しかし、「専門家」は、本来、ある条件のもとで、ある角度からみると次のようなことがいえるという限定的な発言をするものです。両者は基本的に違っています。「専門家」は、本来は特定の価値や自分の思想を語らないものです。

★しかし、実際には、ジャーナリズムはとかく答えを求めたがるものです。「正しい答え」を求めるのです。そして専門家はその「正しい答え」を与えてくれると思っています。ところが、本来は、「専門家」は、正しい答えなど表明できません。彼がいえるのは、「ある一定の条件のもとで、ある角度からすればこういう結論になる」というだけのことです。いわば推論代行業者なのです。あるいは、一定の条件のもとで得られたデータを提供するだけのことです。それをいかに解釈するかは原則的にはいえません。

専門家は本来こうしたものなのですが、実際はどうかというと、専門的知識から得られた限定的条件付きの答えが、あたかも現下の問題の唯一の「正しい答え」であるかのように述べてしまうのです。ここにしても、その専門家個人の思想や考えや主観が入ってきます。

たとえば、経済学者は、しばしば経済政策上の提言をしたり、もっと強く規制緩和や公共事業の廃止といった制度的な変更を提言したりします。ではこれらの提言は、どういう意味をもっているのでしょうか。それらの議論がジャーナリズムのなかで取り上げられたときには、ほとんどそれが唯一の「正しい解決」であるかのように論じられ主張されます。しかし、この場合の「正しい」というのはどういうことでしょうか。それは、せいぜい一定の条件のもとで成り立つ限定的条件付きの結論にしかすぎません。

しかも、通常、経済学の命題は、経済の効率性だけを問題にしています。公正や平等、あるいは「人間らしさ」などというものは問題となっていないません。とすれば、この「正しい解決」は、せいぜい、経済効率という前提のもとでのことにすぎません。にもかかわらず、「専門家の意見」は、あたかも「正しい答え」であるかのように装われ、社会的な影響力をもってしまします。おそらくいいのは、それが一見したところ客観的で科学的にみえてしまうところにあるのです。その実、本当は、ある一定の主観的な価値を前提にしまっているのです。

こうして、さまざまな問題について、それぞれの「専門家」がけつこう発言します。経済学者だけではなく、国際関係論や国際政治をやっている専門家、政治学の専門家、社会学の専門家、心理学や精神分析の専門家、宗教学の専門家などです。今日では、こうした専門家がジャーナリズムに登場する機会はかつてなく多くなっています。

これはたしかにけつこうなことです。ですが、そこでいったい、どういうことが起きるかを考えてみてください。

たとえば、経済学者は株の取引などをできるだけ自由にして、個人が国境を越えた市場で自由に金儲けをできるようにするのがよい、といいます。国際政治学者は、たとえば、世界秩序が不安定化しているから、国家が経済的資源をある程度管理して経済的競争力をつける、といいます。宗教の専門家は、人々が金銭欲にはしっているこの時代にこそ、心のやすらぎを与える信仰が不可欠だといいます。心理学者は、少年・少女の犯罪多発は、インターネットやゲームが野放しになって、家族やコミュニティで子供に安定した精神を植えられることができないからだ、といいます。そこへ社会学者がでてきて、既成の家族よりも女性の社会進出が大事で、コミュニティからの「個」の自立こそが大事だ、いいだします。おまけに栄養学者がでてきて、有機農法にもとづいた自然な食品を自国の農家で生産するのもっとも健康によい、などいいだします。

むろん、これは単なる例です。しかし、これだけでも、「専門家」の「正しい答え」などというものが何なのかは全くわからなくなります。能力主義の市場競争がいいのか、農業中心がいいのか、グローバル経済がいいのか、それとも自国の産業政策が大事なのか、個人が大事なのか、コミュニティが大事なのか、「専門家」の見解からは全くわかりません。「専門家」の「正解」などというものは、せいぜい、ある一定の角度からのものにすぎず、しかもそのほとんどは決して客観的ではないある種の価値を含んでいるのです。

ではどうすればいいのか。むろん、専門家の意見は大事です。しかし、社会の大きな問題について発言する場合には、自分が、社会の問題のどの側面について発言しているかを知っていなければなりません。

「群盲、象をなでる」という言葉がありますが、私たちは、象をなでている限りは、自分が象をなでているという自覚がなければ

ばなりません。言い換えれば、自分がなでているのは象のどの部分かを知らなければなりません。ということはさらに、象の全体像がある程度、知っていなければならない、ということです。象の像がある程度、思い描いていなければ、象をなでているという自覚もでてこないはず⑤です。あらかじめ全体像がわかっていなければ、そもそも象かどうかもわからないはず⑤です。さわってみてただ「ゾー」とするだけです。

そこで、誰かが、象の全体像を、さし示さねばなりません。象はおおよそこういう形をしておるのだ、といわなければなりません。そして、それをいうのが A です。それは B の仕事ではないのです。ところが、現代では、C が、自分のなでた部分を全体にまで拡大して、D になろうとしています。これは困ったことです。だから鼻をなでたものは、これはパイプラインのような動物だといい、足をなでた E は、これは電柱のような動物だといい、尻尾しっぽを触ったものは、これは巨大なぼうきのような動物だということになってしまうのです。専門家はあくまで専門家でなければなりません。専門家はあくまで「専門バカ」なのであつて、ただの「バカ」であつてはならないのです。

(佐伯啓思『学問の力』より)

問一 空欄 X にあてはまる言葉を、一語で、★よりあとの本文中から抜きだしなさい。

問二 — 線部①「社会や人文系の学問で、『オリジナリティ』などということ自体が奇妙なことではないのでしょうか」とありますが、このように言える理由はなぜですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 社会・人文科学の研究では、過去の偉大な学者の成果を乗り越えることは不可能だから。
- イ 社会・人文科学の研究は、自然科学と異なり、先人の成果を少なからず盗用することで成り立っているから。
- ウ 社会・人文科学の研究では、基盤とした先人の成果と自身の思索が分けられないから。
- エ 社会・人文科学の研究は、奇をてらった分野でも、すでに研究がなされているものだから。
- オ 社会・人文科学の研究は、自然科学と異なり、他者による再現が不可能であるから。

問三 — 線部②「小型の思想家」とはどのような思想家ですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 一時的に流行を作り上げた思想家たち。
- イ 研究する価値のない思想家たち。
- ウ 著名な哲学者の影響を強く受けた思想家たち。
- エ これまで顧みられてこなかった思想家たち。
- オ 思索する範囲が狭い思想家たち。

問四 ―線部③「学問のあり方としては本末転倒なのです」とありますが、ここでの「本末転倒」とはどういうことを言っていますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「大物」の研究から十分に学ぶことをせず、「小物」について研究しようとする事。
イ 今まで「小物」とされていた思想家を、さも「大物」であるかのように評価しようとする事。
ウ これまで「大物」とされていた思想家が、実は「小物」であったことを明らかにしようとする事。
エ 自分自身は「小物」であるのに、「大物」の研究から何かを学び取ろうとする事。
オ 「小物」の思想家が、実は「大物」に匹敵する興味深い業績を残していたことを発見しようとする事。

問五 ―線部④「ある種の価値」とありますが、ここでの「価値」とは何を意味していますか。本文中から十六字で抜きだしなさい。

問六 ―線部⑤「さわってみてただ『ゾー』とするだけです」とありますが、これはどういうことですか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 触っているものか思いつかなくて、業を煮やすこと。
イ 触っているものがあまりに巨大すぎて、肝を潰すこと。
ウ 触っているものが次第にわかってきて、固唾を呑むこと。
エ 触っているものがあまりに冷たくて、鳥肌が立つこと。
オ 触っているものが見当が付かなくて、身の毛がよだつこと。

問七 ―線部「専門家は本来こうしたもの」とありますが、筆者は専門家をどのような存在だといっていますか。本文をふまえて五十文字以内で説明しなさい。

問八 空欄 A E には「専門家」あるいは「知識人」のいずれかの言葉が入ります。各空欄にあてはまる言葉を、「専門家」はア、「知識人」はイで、それぞれ記号で答えなさい。

問九 この文章から読み取れる内容として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 多様な分野の研究が発達する現代社会に必要なのは知識人だけであって、専門家の意見は無視してもよい。
イ 既存の研究はまだ研究対象としては魅力があり、新たな研究分野から得られる成果は皆無である。
ウ 各分野の専門家がふえているが、それらの研究成果を統合する見取り図を提示できる知識人の存在が重要である。
エ 地道な研究を続けることにより、現代ではだれもが学者になることができるので、かつてのような専門バカの学者は必要とされなくなった。

オ 専門家は自分の研究対象に没頭するのは当然のことであるが、現代社会を生き抜くために最低限度の世間的常識を身につけるべきである。

受験番号	
氏名	ふりがな

1
2
3
4
(8)
5



1	
	(う)
2	
3	
4	
	(ける)
5	



- 1 
- 2 
- 3 
- 4 
- 5 



四

a
b
c
d
e

問	1
二	
	2
	3

問三

問四

1

11

問八



11

11

五

問

問
一

1881

11

問五

問六

[illegible]

問八	A
	B
	C
	D
	E

問九

